

へき地・複式教育

へき地・複式教育

1 「へき地・複式教育」

「へき地・複式教育」とは、へき地教育と複式教育を縮めて表現した言葉

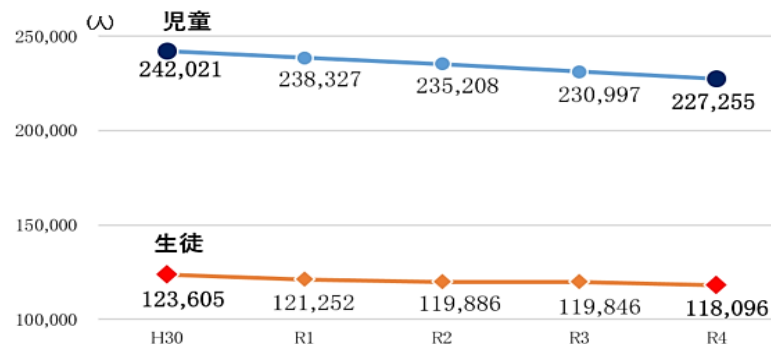
○ 本道の状況

- ・ 過疎化、少子化
- ・ 1校当たりの児童生徒数の減少
- ・ 学校数の減少
- ・ 学校の小規模化
- ・ 複式学級の増加

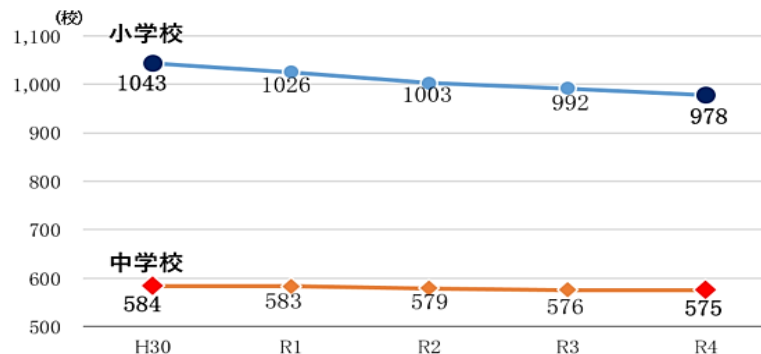


へき地・複式教育のより一層の充実

児童生徒数の推移 (H30~R4)



公立学校数の推移 (H30~R4)



2 へき地教育

○ へき地教育

へき地教育とは、交通条件及び自然的、文化的諸条件に恵まれない地域に所在しており、各都道府県の条例によって指定された小・中学校（へき地指定校）で行われている教育

へき地級地別学校数

	特別地	準へき地	1級地	2級地	3級地	4級地	5級地	計	割合
小学校 (全959校)	17	57	127	88	29	10	6	334	34.8%
中学校 (全554校)	8	39	84	52	13	4	4	204	36.8%
義務教育学校 (全19校)	1	0	2	2	6	0	1	12	63.2%

令和4年(2022年)5月1日現在(札幌市含む)

○ へき地教育の特質

- ・一つの学級が少人数のため、個に応じた指導の充実を図ることができる。
- ・地域的に豊かな自然環境に恵まれており、それらを教材化したり、体験的な活動に生かすことができる。
- ・地域が学校に対して期待と関心をもち、協力的であり、学校と家庭・地域社会との緊密な連携を図ることができる。
- ・教職員の数が少ないため、共通理解が図りやすく、協力的な指導体制を組織することができる。

3 複式教育

○ 複式教育

2個学年以上の児童生徒を、一つの学級に編制した複式学級において行われている教育

※ 複式学級は、学級編制の基準により、二つの学年で構成されるが、児童生徒の学年の人数の違いなどから、変則的な学級編制となる場合がある。

学級編成の基準

<小・中学校>		
同学年の児童で編制する学級	小学校	中学校
	35人(1年生) 40人(2~6年生)	40人
複式学級(2個学年)	16人 (1年生を含む場合8人)	8人
特別支援学級	8人	8人
<特別支援学校(小・中学部)>		
	6人 (重複障害 3人)	

○ 複式学級の特性

右記の特性を理解するとともに、学校や地域、児童生徒の実態を把握した上で、学習指導や生徒指導をはじめとする様々な教育活動を推進

長所と思われること

- ◇ 学級の児童生徒が異学年で構成され、学年の構成員が毎年変わる。
- ◇ 児童生徒が互いに親密な関係をもっている。
- ◇ 少人数で、児童生徒一人一人に応じた指導が行いやすい。
- ◇ 協力者とリーダーという二つの立場を経験できる。
- ◇ 学年別の指導の場合、児童生徒は、教師がつかない時間帯に、数多くの自学自習を経験できる。

課題と思われること

- ◆ 学年や性別による児童生徒数にかたよりがある。
- ◆ 交流の相手が限定されるため、学習場面で多面的に考えながら討議を展開することなどが難しい。
- ◆ 大きな集団での社会的経験の場や機会が不足がちになる。
- ◆ 児童生徒の年齢や学年が異なるため、個々の能力差、個人差が大きい。

4 様々な教育方法

○ 合同学習

1つの学校で2学級以上の児童生徒が学習集団を編成し、一定の人数や集団が必要な学習や、異年齢集団のよさを生かした学習を展開

○ 集合学習

近隣の2校以上の児童生徒を一か所に集め、各教科等の一部の学習活動を各学校の教師の協力的な指導により展開する方法

○ 交流学習

学校規模や生活環境の異なる学校間で、それぞれの学校が単独では体験できない学習や生活をさせる方法

〔ICTの活用〕

近年、遠隔会議システムなどのICTを活用した遠隔交流学習や遠隔合同学習が展開

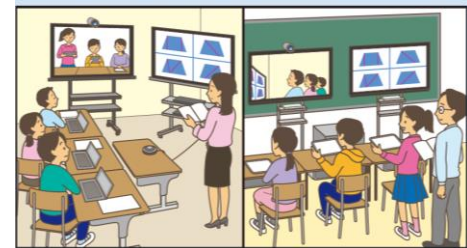
□ 遠隔交流学習

離れた学校とつなぎ児童生徒同士が交流し、互いの特徴や共通点、相違点などを知り合う。



□ 遠隔合同学習

他校の教室とつないで、継続的に合同で授業を行うことで、多様な意見にふれたり、コミュニケーション力を培ったりする機会を創出する。



5 へき地・複式校の特性を生かした学習指導

○ 複式学級における学習指導

へき地・複式教育のもつ特質を効果的に取り入れ、一人一人に応じた柔軟な指導が大切

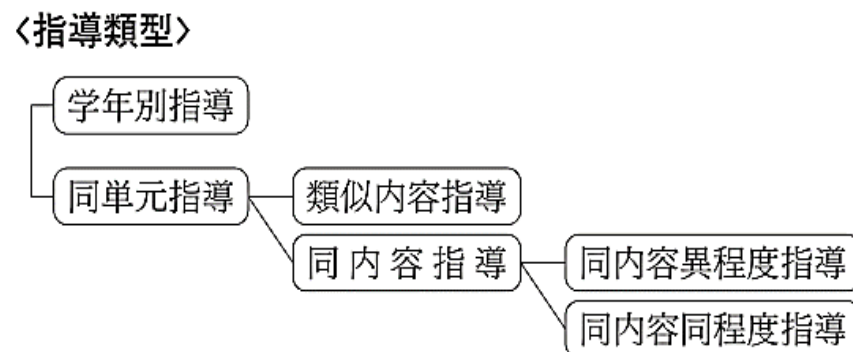
〔基本的な考え方〕

- 地域の豊かな環境を生かした体験的な活動を通して、学ぶことの楽しさや達成の喜びを感じることができるようにするとともに、郷土のよさを理解し、愛する心を培う。
- 自らの力で学習を進める間接指導の充実を図り、学習の仕方を身に付けたり、人間的な触れ合いを深めたりすることができるようにして、主体的な学習態度を育成する。
- 異年齢及び少人数のよさを生かし、一人一人の視野を広げたり、思考力・判断力・表現力などを高め、心豊かに生きる力を育成する。

5 へき地・複式校の特性を生かした学習指導

○ 学習指導の指導類型

- ・ 複式学級における学習指導では、2個学年の児童生徒を同時に指導していくため、指導内容の組合せや指導方法の工夫が必要
- ・ 指導類型には学年別指導、同単元指導などがあるが、効果的に学習を展開するには、それぞれの指導類型の特性を理解し、学校や児童生徒の実態等を考慮して指導計画を立てることが大切



〔参考〕 小学校学習指導要領第1章総則

「第2 教育課程の編成 3教育課程の編成における共通的事項(1)内容等の取扱い」

オ 学校において2以上の学年の児童で編制する学級については、特に必要がある場合には、各教科及び道徳科の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科及び道徳科の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる。

へき地・複式教育

5 へき地・複式校の特性を生かした学習指導

○ 指導類型と教科の組合わせの例

	主な特性	主な類型	組合せの例		
学年別指導	<ul style="list-style-type: none"> 学年の発達段階、教科の系統性を踏まえられる。 思考が連続するように学び方を定着させる必要がある。 	異教科	5年生 6年生	図工 算数	
		同教科異単元	3年生 4年生	国語	文や文章を書く 詩の鑑賞
同単元指導	<ul style="list-style-type: none"> 協力的な学習ができ、交流を深められる。 教科の系統性や順次性、下学年や転出入児童生徒に配慮する必要がある。 	類似内容異程度 一本案 ※2	3年生 4年生	理科	電気や磁石を調べよう 電気や光のはたらき
		同内容同程度 二本案 ※1	3年生 4年生	社会	安全なまちづくり (3・4下) 安全なまちづくり (3・4下)
			※ただし、この方式をとる場合、学年差に十分配慮して学習活動を展開することが大切である。		
		同内容異程度 一本案	5年生 6年生	体育	「マット運動」(回転する技) 「マット運動」(倒立する技)
折衷案	一本案を主体に、一部二本案を取り入れる。 二本案を主体に、一部一本案を取り入れる。 ただし、学年別の計画が入ることもある。				

※1 二本案：学習すべき上下両学年の内容を、2年間で平均的に配分し、いずれの年度においても両学年同時に同じ内容を、上下両学年のそれぞれの目標のもとに、同程度に指導しようとする案

※2 一本案：日本案の短所を補うように作成されたもので、単元は同じであっても、上下両学年の指導目標を達成することができるよう、指導の内容や程度を変えて指導計画を作成する案

5 へき地・複式校の特性を生かした学習指導

○ 学習指導の改善のポイント

学習への興味・関心を持続させ、学習活動の質を高めるには、次のような視点から授業を工夫することが大切

- ・ 問題解決の手順や調べ方などを指導し、学び方を身に付けさせる。
- ・ 児童生徒の発言や体験などの機会を多く設定したり、ICTを効果的に活用した学習活動を構想するなどして、学ぶ意欲を育てる。
- ・ 教師もともに学習するという姿勢をもち、話し合い活動を活性化したり、一人一人との対話を大切にしたりして、表現力を育てる。
- ・ 学習のステップを明確にし、学習に対する個人目標をもたせるとともに自己評価の機会をつくるなどして、主体的に学習に取り組む態度を育成する。

※少人数の学習指導においては、児童生徒一人一人に応じた対応が可能である一方、教師のリードが強すぎたり、児童生徒の多様な発想や考えの交流が不十分になりやすくなることに留意

6 複式学級における学習指導の実際

○ 学習過程

- ・ 一般的には、次のような4段階の学習過程
- ・ 基本的な学習の流れを理解させ、定着させておくことが必要

〔4段階の学習過程〕

段階	① 課題把握	② 解決努力	③ 定着	④ 習熟・評価
学習活動	学習課題が分かり、解決への見通しがもてる。	自分なりの方法で解決に向けて努力する。	学習結果を交流し、学習を見つめ、学習事項が分かる。	学習を深めたり、自己評価を行ったりして、次の学習への意欲をもつ。
指導	直接指導	主として間接指導	直接指導	主として間接指導

※学年別指導の場合は、直接指導と間接指導の場面が生じる。

6 複式学級における学習指導の実際

○ 直接指導と間接指導

・ 直接指導

学年別指導において、一方の学年の児童生徒に教師が直接的に行う指導

・ 間接指導

直接指導ができない他の学年の児童生徒が、自主的に学習が進められるよう指示を与えておいて行われる指導

〔指導の留意点〕

直接指導	間接指導
<ul style="list-style-type: none">・ 自学自習を成立させる契機とする。・ 指導内容を精選し、学習方法や条件を整え、学習課題を明確にする。・ 自学自習を支える基礎・基本の指導をする。・ 学習したことを確認し、賞賛して、自主学習への意欲をもたせる。	<ul style="list-style-type: none">・ 児童生徒の自主性を養う絶好の機会とする。・ 学習の目標をはっきりつかむことができるように、指示を明確に伝える。・ 学習技能を定着させ、個人が自学自習や小集団での学習活動をできるようにする。・ 次の直接指導につながる準備の時間とする。

6 複式学級における学習指導の実際

○ 両学年（上学年と下学年）の学習を成立させる工夫

複式学級で学年別指導を行う場合、直接指導と間接指導のバランスのとれた学習を成立させるため、上学年と下学年の間に「わたり」や「ずらし」という工夫が必要

・わたり

教師が一方の学年から他方の学年へ交互に移動して直接的な指導を実施

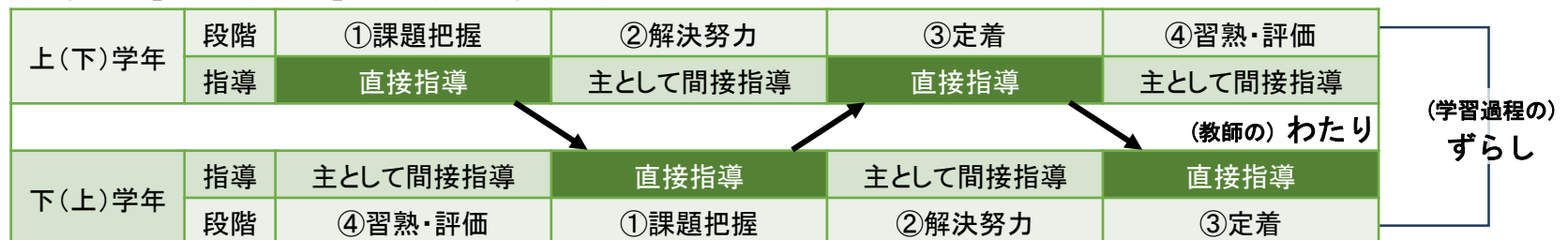
※学年の間をわたり歩く教師の動きを「わたり」と呼ぶ。

・ずらし

教師が2学年間を交互にわたり歩き、学習活動を無理なく効率的に行うため、学習過程を学年別にずらした組み合わせ

※学習過程を学年別にずらした組み合わせを「ずらし」と呼ぶ。

〔「わたり」と「ずらし」の基本的な模式図〕



6 複式学級における学習指導の実際

○ 学習評価の考え方

- ・ 少人数の学級においては、一人一人に接する時間も多く、児童生徒のよさや可能性を伸ばす指導が可能
- ・ 児童生徒一人一人の目標の実現状況を評価し、指導計画や指導方法の改善に生かすことが大切

○ 少人数学級における評価の特徴

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none">・ 一人一人を見つめることができ個別の目標を設定しての評価が可能・ 全人的にとらえる評価が可能・ 形成的評価の、評価の処理が容易であり、形成的評価の回数複数回設置が可能・ 事後の指導が容易	<ul style="list-style-type: none">・ 集団による協力など相互作用に恵まれず、それを必要とする評価が困難・ 少人数のため固定的になりがち・ 主観によるあいまいさ・ 評価しなくても分かるという安易さに陥りがち

へき地・複式教育

参考資料

【北海道教育大学へき地複式教育センター】



【北海道へき地・複式教育連盟】

